

第106回企画展「ちょっと懐かしい民具展」展示目録

No.	資料名	使用時代	資料説明
1	電話	明治後期 ～大正	右側のハンドルを回して交換手を呼び出し、相手の番号を告げて呼び出してもらう旧式の物。余目の電話第1号は、明治42年5月余目巡査駐在所。
2	黒電話	昭和	回転ダイヤル式電話機の総称。1963（昭和38年）日本電信電話公社（現在のNTT）によって制式化され、提供が開始された。一般電話加入者に提供された3号・4号・600形および601形の各電話機で、1970年代まで日本の家庭を席卷した。
3	携帯電話	昭和 ～現在	携帯電話が一般向けに初めて誕生したのは1985年。その後、軽量化、小型化、カメラ付き携帯など進化を続け、現在は一人1台スマホの時代となっている。 展示している初代「INFOBAR（インフォバー）」は、2003年に登場。その優れたデザインが認められ、ニューヨーク近代美術館に収蔵されている。
4	火のし	江戸～ 明治初期	中に炭火を入れて、柄を持って使う。底は、布のしわをのばしやすいうように平らになっている。
5	炭火アイロン	明治～ 昭和初期	電気アイロンと形は似ているが、アイロンの中に熱い炭を入れて使う。中のガスを抜くために煙突が付いている。
6	電気アイロン	昭和初期 ～現在	炭火から電気になり、温度調節機能や霧吹きが一体となったスチームアイロンに変わり便利になった。現在は、コードレスのものもある。
7	そろばん	江戸 ～現在	そろばんは日本や中国で用いる計算器具で、宋末期（1200年代の中頃）から元代（1271～1368年）に中国で発明され、14世紀～16世紀にかけ普及、日本には室町時代末期（1500年代の中頃）に伝来したといわれる。その頃のそろばんは、珠が丸く、梁の上に五珠が2つ、梁の下の一珠が5つあった。そのそろばんをもっと速算に向くように珠をシャープにし、不用な珠を取り除いたのが梁の上に五珠が1つ、梁の下に一珠が5つの「五珠そろばん」である。このそろばんは江戸時代から昭和の初めまで使われていたが、昭和10年の文部省の省令で現在の四珠そろばんに代わった。
8	タイガー計算機	大正～ 昭和	大本寅治郎が大正8年に国産計算機の発明考案に着手し、大正12年「虎印計算器」として販売を開始、電卓計算機の普及により姿を消した。昭和50年代の初めまで郵便局や役場で使用され、主に割り算と掛け算に使われた。検算用に便利だった。
9	電卓	昭和	電子式卓上計算機また電子式卓上加算機の略であり、加減乗除の四則演算を中心とする比較的簡単な計算を内蔵された電子回路で行う小型計算機である。世界初の電卓は、1962年に英国Bell Punch社から発売されたAnita Mk8であるといわれている。日本最初の電卓は、シャープ（当時は早川電機）が1964年3月に発表したCS-10A。世界で最初のオールトランジスタ型の電卓といわれている。価格は53万5000円と車を買えるほど高価なもので、重量も25kgあった。
10	やたて 矢立	鎌倉時代 ～明治	筆と墨壺を組み合わせた携帯用筆記具。鎌倉時代、戦場に筆記具を携行するときは籠に小型の硯と筆を入れる習慣があり、この硯のことを「矢立の硯」と呼んでいたことから次第に、携帯用の筆記具一式を「矢立」と呼ぶようになった。墨壺には墨汁がこぼれないように、綿やもぐさなどをいれて持ち運びしていた。明治期に万年筆が輸入されて普及すると、筆職人の減少や毛筆の使用機会減少などに伴い廃れていった。

11	せまばん 石板	明治～ 昭和初期	欧米から低年齢児童の書写用具（ノートの代わり）として入り、一般に用いられた。石筆で書き、布で消して使用する。学習記録が不可能なところから、次第に姿を消した。石筆は、ろう石（蠟のように半透明でやわらかい石）を鉛筆状に加工したもの。石筆は熱に強いいため、現在でも建設現場や鉄工所などで溶接や溶断の印付けに使用されている。
12	タイプライター	昭和	指で文字盤を押すことで活字を紙に打ち付け、文字を印字する機械。筆記業務の高速化、各種原稿の清書といった目的で使用され、カーボン紙を挟んで複数枚の紙に同時に印字することで文書の複写もできたことから、会社での事務や個人の文章作成などに幅広く使われた。
13	和文タイプライター	大正～ 昭和	1915年に活版術改良協会の技術主任だった杉本京太氏により「邦文タイプライター」として発明されたもの。これにより日本語の文書作成は一気に効率化し、1920年代以降の政府公文書や企業の商用文の多くはこれで作成された。アルファベットを打てば用が足りる英文のタイプライターとは違い、「和文タイプライター」では多くの種類の文字を扱う。特に漢字の数は膨大で、2000字をゆうに超える膨大な活字の中から使用する字を探し出して打ち出す「職人芸」が必要とされた。ワープロが普及する1980年代からは急速に姿を消していった。
14	レコード	明治～ 現在	語源は「記録」という意味の英語「record」。樹脂などでできた円盤に音楽や音声などの音響情報を刻み込み記録したメディアの一種で、直径12インチ（30cm）で収録時間が30分のLP(long play)レコードや直径17cmで収録時間が5分から8分程度シングルレコードなどがある。シングルレコードは、中心穴の径が大きく、ドーナツを想起させるため、「ドーナツ盤」と呼ばれた。1980年代にCDが発売されて以降、レコードの生産量は減少していったが、近年再び注目を浴びている。
15	カセットテープ	昭和～ 現在	記録用の磁気テープを巻きつけるためのリールなどをケースの内部に収めてひとつにまとめたもの。日本では1966年にTDKがOEMでカセットテープの生産を開始した。1960年代後半からラジカセが世界で爆発的に普及するとともにカセットテープは音響記録媒体の主流となった。1970年代半ばには、ライブ演奏の生の音を録音したり、FM放送を録音すること（エアチェック）が流行し、カセットテープの需要量は増えていった。
16	CD	昭和～ 現在	コンパクトディスクの略。1970年代にソニーとフィリップスが共同開発し、1980年代初めに製品化された記憶媒体。レーザー光を使ってデータの読み出しや書き込みをする。レコードに代わり音楽を記録するための媒体として開発された。展示しているビリー・ジョエルのアルバム「ニューヨーク52番街」は、1982年10月1日にCBS・ソニーから発売された50タイトルの中で一番最初に製造されたCDで、世界で初めて販売されたCDと言われている。
17	CDデッキ	昭和	CDを再生するための機械。
18	ポータブルカセットプレーヤー	昭和	カセットテープを再生できる携帯用のオーディオプレーヤー。1979年にソニーがウォークマンを発売。「音楽を携帯し気軽に楽しむ」という新しい文化が創造された。
19	デジタルミュージックプレーヤー	昭和	2000年代に本格的に普及しはじめた記録媒体にフラッシュメモリや小型ハードディスクを使用した音楽プレーヤー。メーカーごとに様々な製品が発売され、機能にはいくつかのバリエーションがあり、単に音声ファイルの再生だけでなく、多機能化機種もある。
20	蓄音機	明治～ 昭和初期	1877年（明治10年）に、エジソンの発明で生まれた蓄音機は、音楽が繰り返し聴ける画期的な道具だった。レコードを中央において針を落とし、ハンドルを回して音楽を再生した。

21	ステレオ	昭和	レコードやラジオを聴くための機械。ステレオとは、左右2つのスピーカーで音声を再生する方式のことだが、1960年代以降、一般家庭に普及するに従って、レコードプレーヤ、アンプ、スピーカーが横長の家具調キャビネットに一体化した「アンサンプル型」が主流となり、これが「ステレオ装置」または、単に「ステレオ」と呼ばれるようになった。
22	<small>おんじょうぐら</small> 恩賜郷倉の看板	昭和	郷倉は凶作に備えた貯蔵穀倉。昭和9年から10年にかけて東北地方は記録的な凶作で、この時皇室から御下賜金を基とし政府の補助金と合わせて建築された郷倉を恩賜郷倉という。
23	謄写版	昭和	印刷する道具。ろう引きの原紙をヤスリ版の上ののせて鉄筆で文字や絵を書き、版を作る。版を謄写版の網に取り付けて印刷する紙をはさみ、網の上からインクをローラーで押し付けると文字や絵が印刷される。ガリ版ともいう。
24	足踏みミシン	昭和	足元にある踏み板をふむとそれに合わせてミシン針が上下に動き、手縫いよりもずっと早く縫うことができる。大正時代になると日本でも動きやすい洋服を着る人が増え、またこの頃から日本でもミシンが作られるようになり、大切な嫁入り道具の一つとなった。
25	テレビ	昭和	国内で国産テレビ第1号のテレビが市販されたのは1953（昭和28年）。同年、NHKの放送が開始された。高卒公務員の初任給が5千4百円の時代にテレビは17万5千円と庶民には手が届かないものだった。その後、洗濯機や冷蔵庫と共に「3種の神器」として家庭に普及した。カラーテレビの本放送は、1960（昭和35年）9月10日、NHKと民放各局が開始した。これは、アメリカ、キューバに次いで世界で3番目のことだった。
26	ラジオ	明治～ 現在	ラジオが世界に初めて登場したのは1900（明治33年）。カナダの電気技術者レジナルド・フェッセンが距離約1マイルでの音声の送受信に成功した。それ以降世界各地で実験、試験的なラジオ放送が行なわれた。日本初のラジオ放送が行なわれたのは、1925（大正14年）で、社団法人東京放送局によって発信された。
27	かき氷機	昭和	駄菓子屋などで使われたかき氷機械。夏の風物詩。
28	こおりすい	昭和	かき氷を入れる器。
29	かき氷台	明治	台の上で氷を滑らせて削り、かき氷を作る道具。氷は、製氷技術がなかった時代に、冬場にできた天然氷を氷室という小屋で保存した。夏場の氷はとても貴重で、朝廷や将軍家など一部の権力者のものだった。明治時代になると人造氷の生産が拡大し明治20年代には“かき氷”は大衆的な食べ物となった。
30	ハイトリック	大正～ 昭和	時計メーカーが大正8年に発売した自動ハエ取り機。ゼンマイを巻くと四角い軸が回る仕組みで、四角いローラーの部分に砂糖水や油を塗りハエをおびき寄せる。このローラーがゆっくり回り、ハエが内部（かごの部分）に入って出られなくなるという仕組み。高価だったため学校や病院、飲食店などで使われた。
31	ハエ取り瓶	明治～ 昭和	ハエを取るための道具。ガラス製で上部の口にふたがついている。底は中央が内部に丸く湾曲して立ち上がり、その先端に穴が開いている。容器の中に米の研ぎ汁または水を入れ、容器の下に飯粒や砂糖を置くとハエが下から入って水の中落ちるという仕組み。水平にしか飛べないハエの習性を利用した画期的な道具。
32	買い物かご	昭和	買い物で使うかご。昭和40年代にはスーパー袋の普及により姿を消すが、現在は見直されてプラスチック製のマイバケットが使われている。
33	小風呂	昭和	赤ちゃんを沐浴させるためのお風呂。
34	脱衣かご	昭和	着替えや脱いだ服を入れておくかご

35	柱時計	明治～ 昭和	ぜんまいで動く時計。柱にくぎを打って掛けていたので柱時計という。ネジを巻いておかないと止まってしまうので、家族の誰かが係になって定期的にネジを巻いた。時間を合わせる時は、ふりこの長さ（遅れる時は、ふりこを短く、進む時は長く）で調節した。
36	茶箆筒	昭和	食器を入れておく家具。茶箆筒は、もともと小型の携帯用の茶道具入れのことだったが、明治時代になると茶の間が食事の場所や居間として家の中心的な部屋となったことからそこに置く便利な家具として需要が増えていった。展示している茶箆筒は、余目新田の指物師真田長市が製作したもの。
37	マント (ダルマコート)	昭和	防寒着。冬、風の強い庄内では、小学校の登下校時、上級生がマントの中に下級生を入れて暴風雪から守ってくれた。
38	長火鉢	江戸後期 ～明治	冬の暖房器具。長火鉢は江戸時代後期にケヤキを材にしたものが使われるようになった。指物師がつくった高級品で、町家や商家で使われた。展示している長火鉢はお寺で使われていたもの。
39	ダルマストーブ	明治～ 昭和	石炭を燃料にする暖房器具。鋳物製でどっしりと大きく、形が達磨に似ていることからそう呼ばれた。胴体の前部に扉があって、石炭を投げ込む口になっており、後部に煙突をつけて排気ガスを外に逃がす構造になっている。昭和30年代に入ると石炭産業の不況、石油ストーブの普及により、次第に姿を消した。
40	石炭入れ	昭和	石炭を入れて運ぶバケツ。
41	編み機	昭和	編み物をする機械。「棒針り編み」と同じ組織を編むことができ、手編みより速く編めて独特の風合いと機械でしか編めない変わった編み方ができる。戦後の日本においては、まだ洋服は買うより作る方が安く、1950年代の家庭洋裁全盛時には、家庭用ミシンの普及とともに、編み機も普及していった。時代とともに既製品のニットウェアが手ごろな価格で販売されるようになり、家庭用編み機の需要は減っていった。

※使用年代が違うなどございましたら、事務局までご教示願います。